

# 総合的な学習の時間の実践報告

## —教科横断と高大連携の可能性を探る試み—

第 3 学年 小田原健一、川上佳則

平成 30 年度 2 学期に実施した第 3 学年の総合的な学習の時間の実践について報告する。

4 月の準備段階で教科横断的な授業の実施という大枠が決定したが、その後、愛知教育大学の先生方からもご助言・ご協力が頂けることになり、高大の教員で連携しながら授業の準備、実施、振り返りをすることができた。生徒アンケートから今後に向けての課題も見えてきたが、教育大学の附属高校として高大連携での授業を今後さらに進めるための貴重な試みができたと捉えている。

<キーワード> 教科横断 高大連携 負担軽減

### 1. はじめに

平成 30 年度の第 3 学年は、前半の総合的な学習の時間で国際情勢研究を実施した。この段階で既に後半の総合的な学習の時間では、各教員の協力のもと教科横断的な授業を実施することを決めていた。当初の構想では、生徒が受験を控えていることもあり、生徒が調べたり、発表したりという活動をするよりも、ある科目で学んだ知識を他の科目で活用させることで、学びの繋がりや楽しさを実感させられる授業をめざしていた。

最初に教科横断のプランが出来上がったのが世界史（担当：小田原）と英語（担当：川上）であった。担当者二人で検討を進めていくうちに、歴史（日本史・世界史）と英語の教科横断授業を実施した後に、そこで学んだことを活かせるような活動をした方が、総合的な学習の時間の趣旨にも合い、他の教員の負担軽減にもなると判断し、当初の構想を変更して授業を実施することとした。

また、10 月からの実践に向けて準備を進めていた夏休み期間中に開かれた大学と附属学校の共同研究会で、愛知教育大学・社会科教育講座の真島聖子先生に授業の概略を伝えたところ、授業の準備段階からご協力頂けることになった。その後、真島先生を通して愛知教育大学・外国語教育講座の小塚良孝先生にもご協力を頂けることとなり、教科横断と高大連携の体制を整えることができた。

今年度の実践で見えてきた課題はいくつかあるが、次年度以降も、この反省を活かして教科横断的な授業に取り組み、附属高校としてさらに高大連携で高校生に授業ができるようにしていきたい。

なお、本稿の執筆は「1. はじめに 2. 準備 5. 探究活動 6. 今後に向けて 7. おわりに」を小田原と川上が共同で、「3. 英語の実践」を川上が、「4. 歴史の実践」を小田原が担当した。

### 2. 準備

#### (1) 1 学期 ～教科横断の模索～

本校の第 3 学年は文系 3 クラス、理系 2 クラスで編成されているが、理系 2 クラスは理科課題研究に取り組むため、総合的な学習の時間は文系 3 クラスのみで実施している。総合的な学習の時間の内容については学年により異なるものの、ユネスコスクールの認定を受けて以降、持続可能な社会作りや国際

理解を意識した取り組みが多くなっている。今年度の3年生も4月から9月にかけて国際情勢研究に取り組むこと、10月以降の後半には教科横断授業を実施することを決定した。当初は、体育と国語、世界史と国語などの組み合わせも浮かび上がったので、6通りの組み合わせを作って3クラスを巡回して授業を実施する計画を立てていた。しかし、日々多忙な中で具体的な授業プランは作成できないまま1学期を終えることとなった。

## (2) 夏休み ～教科横断から高大連携へ～

普段よりは時間にゆとりができたこともあり、小田原（世界史担当）と川上（英語担当）の間で打ち合わせをしたところ、教材としてマルコ・ポーロの『東方見聞録』（『世界の記述』）を活用し、1回目の授業で英語訳版の読解などに取り組み、2回目の授業で日本史や世界史の知識を踏まえて解説するというプランを練っていった。打ち合わせを繰り返しているうちに、川上から「2回の授業で学んだり、経験したりしたことを活かして、3回目以降の授業で生徒に活動させてはどうか。」という提案があった。3年生の2学期ということもあるので時間の制約はあるものの、現行学習指導要領（平成21年3月公示）では総合的な学習の時間の目標を「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする。」と定めている。この目標を達成するためにも、また他の教員に過重な負担をかけないためにも、3回目以降は探究的な学習をさせることを小田原と川上で決定し、学年の教員からも了解を得た。

その後、小田原と川上で3回目以降の授業内容の検討をしていく中で、かつてコロンブスが『東方見聞録』を愛読し、その影響もあり航海に出たということに注目した。そして、これを現代の日本の視点に置き換え、外国人観光客を地元へ誘致するプランを作成するという授業を考案していった。ここ数年、インバウンド（訪日外国人）を増やそうという取り組みは各自治体で実施されており、ウェブサイトを見れば企画書を掲載している自治体も多数見られた。これらを参考にワークシートの原案（図1）を作成した。

また、毎年夏休み期間中の8月上旬には愛知教育大学と附属学校の共同研究会が実施されるが、今年度はその社会科部会で社会科教育講座の真島聖子先生から「高大連携の授業に関わってみたい。」とご提案をいただいた。小田原が少しずつ固まっていた総合的な学習の計画の概略を話したところ、興味を示してもらえ、授業の準備段階からご協力をいただけることになった。こうして、教科横断だけでなく高大連携という形式で授業ができる目処が立った状態で夏休みを終えた。

## (3) 2学期 ～高大連携の可能性を追究～

本校は教育大学の附属高校であるが、通常の授業における高大連携は国語科での実践を除くと十分には広がっていない状況にある。真島先生のご協力が得られたことで、この総合的な学習の時間の授業は、国語科での事例のように高大連携ならではの深い学びにつながる可能性が出てきた。

10月上旬、真島先生と外国語教育講座の小塚良孝先生、小田原、川上の4者で初めての打ち合わせを行い、大学の先生方から多くのご助言をいただいた。特に「自治体の誘致計画書の作成では、『東方見聞録』を教材とした授業との関連性が薄くなり、学んだことを活用できない。」「愛教大に留学中の外国人留学生にターゲットを絞って、日本国内の魅力伝えてはどうか。」という2つのご助言は、この授業の可能性をさらに広げてくれるものであった。この打ち合わせ後もメールで高校教員からワークシート

の案を示し、大学の先生方からのご助言をうけて改良を加えながら、最終的には『附高版 東方見聞録』と題したワークシート（図2）を作成し、これを基に生徒がプレゼンテーションをすることとした。

甲 小田原観光誘致計画書	
1 主な誘致対象地域・国	
2 主な誘致対象層（年齢・性別など）	
3 PR方法	
4 観光資源	
1 歴史	
2 自然	
3 文化	
4 食	
5 その他の観光資源	
5 近辺自治体との連携	
1 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	連携の ポイント
2 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	連携の ポイント
6 想定される課題と解消方法	
1 課題	
2 解消方法	
7 モデルプラン	
1 フランを	
2 PRポイント	
3 行程	
1日目	
2日目	
3日目	
4日目	

図1：誘致計画書の原案

附高版『東方見聞録』Tales of A. J. E.	
1 紹介する地域(Area)	
2 観光資源(Resources for Tourism)	
(1) 歴史(History)	
(2) 自然(Nature)	
(3) 文化(Culture)	
(4) 食(Food)	
その他の注目点 Additional Information	
(5) 周辺地域 Local Information	
3 紹介文(Reports)	
4 モデルプラン(Example)	
(1) フランを(Flan)	
(2) 行程(Itinerary)	
1日目	
1st Day	
2日目	
2nd Day	
3日目	
3rd Day	
4日目	
4th Day	
執筆担当 (Name)	

図2：実際に生徒が取り組んだ『附高版 東方見聞録』

また、打ち合わせの時には大学の先生から「教科横断の取り組みを広めるためには、生徒への教育効果を高めることだけでなく、教員にとっても他教科との連携が深まり、最終的には負担増にならないことを示す必要がある。」というお話をいただいた。ここ数年、小田原は世界史の授業で教科横断型授業を試み、理科、数学、国語の教員に協力してもらってきた。その結果、個人の力量では伝えきれない内容を生徒に伝えられたので、教育効果が高まり小田原の負担は減っていた。しかし、協力してもらったので、他の教科の先生に頼るばかりで負担をかけることになっていたのも事実である。そこで、この実践のもう一つの狙いとして、長期的には負担軽減につながることを示すことも浮上してきた。

### 3. 英語の実践（川上）

#### (1) 夜明け前の出帆

文科省がカリキュラムマネジメントを推進する文脈の中で、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のために、教科等横断的な学習を充実すること（文科省 2018）」が明記されるようになったのは、総合的な学習の時間だけでなく、合科的な授業の開発を考え、進めようとしているものにとって、力強い追い風になる。大学の先生方と協同で話を進める際にも、これから学校に求められるカリキュラムマネジメントと本プロジェクトがいかに強く繋がっていて、進むべきベクトルが一致しているかについて繰り返し話題になっている。

今回の教科横断的授業の計画から実施に至るまで、私たち授業者自身、様々な準備や新しい試みが必要であった。テキストや問題集が無い状態で、最初に協同で取り上げたテーマ、「マルコ・ポーロの東方見聞録」を唯一のキーワードとし、手探りで授業プランを作り上げることになった。

今回の授業は英語を取り扱うが、英文法や精読を重視せず、あくまで次の歴史の授業に繋がる情報を「英語を通して探し、獲得する」体験を主たる目的とした。そのために、なるべくリアルな教材を提供すること、たとえば彼らに本物の東方見聞録を見せるようなことを考えていた。

しかしながら、まずは自分自身、マルコ・ポーロとは実際何者か、東方見聞録は現存するのか等、分からないことが山積みだった。準備のためにひとつひとつ整理しながら、世界史を担当する小田原と協同し、適宜相談できたことで、私たち自身が興味を高めて学びながら準備を進められたと感じている。スタートから教科横断授業を通して教員間で得られるものがあることを強く感じつつ、本プロジェクトが始まったように思う。

#### (2) 羅針盤の無い船旅

まずは主たる教材となる「東方見聞録」探しが最初のタスクだったが、実際、その原本を探すと言っても、13～14 世紀に生きた人物が書いた世界的に有名な書物が現在もあるのか、あったとしても国内には存在しないのではないかと不安ばかりが募る中、とにかく探してみることにした。

幸いなことに、15 世紀に出版されたラテン語版（世界に 800 部のみ現存）の *Of the MARCO POLO ITINERARIES, Antverpiae* (1485) と、20 世紀初頭に英訳された（正確にはラテン語版の訳と一部異なる）*THE TRAVELS OF MARCO POLO* (1908) が鶴舞図書館にあり、そのコピーを教材として利用することにした。今回は「黄金の国ジパング」の場面をフォーカスすることになっていたのですが、ラテン語版と英語版の同じ部分を選んでコピーすることにしたが、なにしろラテン語がほとんど読めない私は、英訳版を頼りに 2 冊を比較しながらジパングが書かれている箇所を探す他なかった。幸か不幸か私自身がまず身をもって、英語を用いて未知の言語から情報を探し出すという経験をするようになったのも、結果としてこの後の授業作りに大いに役立ったと言える。

何度も見直す中、複数回ラテン語で **Kaam** という記述を見つけ、それがフビライ・ハンだと推測・特定できたことで、最終的に目的の箇所を探し出すことができた。すべての作業が終わったとき、調べ始めてからおよそ 5 時間が経過していたが、疲労感より達成感の方が強かったと覚えている。

#### (3) 賢人たちの力を借りて未知の島へ

授業の中で、ラテン語版のインパクトを全面に押し出すことは、愛知教育大学の真島先生、小塚先生との協議の中でも一致した。今回は、普段の授業では無い特別感を大切にすることや、少ない手がかりを元に、目の前の課題（あるいは謎）をじっくり考えさせることをテーマとした。

私自身が先んじて経験したように、二つの言語情報があり、片方が未知の言語であれば、自分が（かろうじてでも）分かるもう一方を使うしかない。ラテン語はその状況設定に向いているが、それ自体大変難解なので、彼らの活動内容（課題）は今回のテーマに関わる「場所」、「人」、「モノ」を問う以下の3つの謎解きに限った。

謎①「英語版にある空所に当てはまる言葉は何か。ラテン語版と比べて探せ。（ジパング）」

謎②「この中にあなたたちがすでに歴史の授業で学んだ人物がいる。誰か。（フビライ・ハン）」

謎③「結局、この書物は何か。（マルコ・ポーロの東方見聞録）」

内容を考えたり、協働したりする時間を確保するために、英語版の単語・語彙の和訳は一覧にして先に渡した。英語版とラテン語版を見開きで並べ、キーワードとなる部分の英語を空所で抜いておいた。なお、小塚先生からは、英語版がラテン語版とはいくつかの部分で異なっていることを和訳した上で分かりやすくご指摘いただけたことで、ワークシートを準備する際、内容の信頼性を確保することができた。専門性の高い大学の先生方のサポートが、私たちが未知の領域を進むための心強いサチライトとなった。実際に用いたワークシートは、以下の図3の通りである。

図3：配布したワークシートの一部抜粋（左が英訳、右がラテン語版）

CHAPTER II  
OF THE ISLAND OF

is an island in the eastern ocean, situated at the distance of about fifteen hundred miles from the main-land, or coast of Manji. It is of considerable size; its inhabitants have fair complexions. Their religion is the worship of idols. They are independent of every foreign power, and governed only by their own kings. They have gold in the greatest abundance, its sources being inexhaustible, but as the king does not allow of its being exported, few merchants visit the country, nor is it frequented by much shipping from other parts. The entire roof is covered with a plating of gold, in the same manner as we cover churches, with lead. The ceilings of the halls are of the same precious metal, many of the apartments have small tables of pure gold, of considerable thickness; and the windows also have golden ornaments. In this island there are pearls also, in large quantities, of a red (pink) colour, round in shape, and of great size, equal in value to, or even exceeding that of the white pearls. There are also found there a number of precious stones.

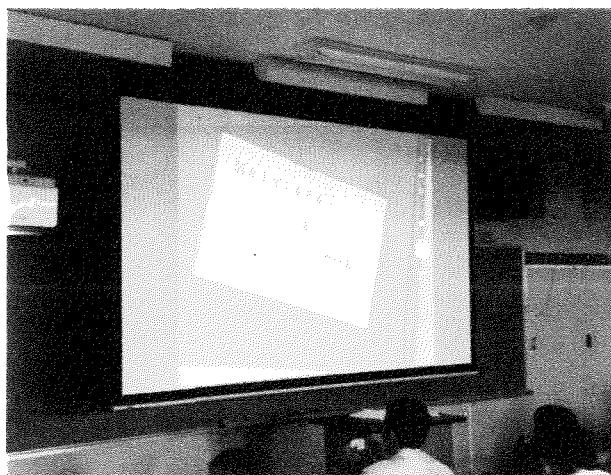
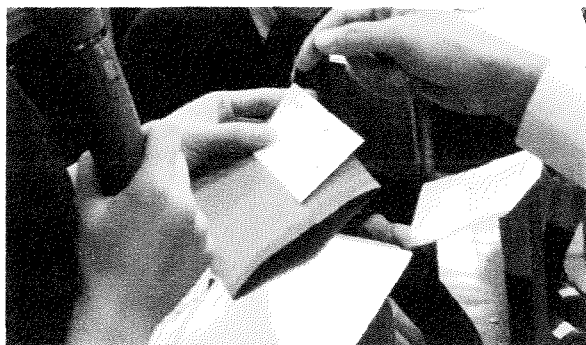
De insula *Ljampagu* Capitulū secundū

**D**huc ad describendū regionē yndic accedam⁹ et in-  
cipiā ab insula *Ljampagu* q̄ est insula ad orientē i al-  
to mari distantia littore mangy p̄ miliaria mille et cccc. et ē  
magna valde habitatores eius sūt decentis figure ydola-  
tre sunt et regē habent s̄o nulli alij tributarij sunt. Ibi est  
aurū in copia maxima sed rex de facili eū extra insulā por-  
tari nō p̄mittit p̄pter q̄d mercatores pauci vadunt illuc et  
naues raro illuc ducūtur de regionibus alijs. Rex insule  
palaciū magnū habet auro optimo sup̄tectū sicut apud  
nos eccie op̄itur plūbo. Genestre ip̄ius palacij oēs auro  
ornate sūt pavimentū aulaꝝ et camerarū multarū aureis  
tabulis est coop̄tū que quidē auree tabule duoz̄ digitorū  
mensurā in grolitudine p̄tinent. Ibi sūt margarite in co-  
pia maxima q̄ rotūde et grosse sūt rubicq̄ colorie que mar-  
garitas albas p̄cio et valore p̄cellūt/multi sūt cccā ibi lapi-  
des p̄ciosi p̄pter quod insula *Ljampagu* opulentiſſima  
est valde

#### (4) ヒントカードという仕掛け

今回用意する教材づくりをチームで試行錯誤する中で、もっとも力が入ったのが、ヒントカードであった。実際のところ、前述の3つの謎を英語とラテン語だけで見つけ出すのは難易度が高く、場合によっては、やる気自体を失ってしまう生徒がいるのではないかと考え、一定時間毎に大教室正面のスクリーンにそれぞれ一つずつヒントを投影することにした。ここでも、特別な雰囲気醸し出せるように、わざわざ封筒に入れたヒントカード（ヒントが書かれたもの）を代表生徒がプレゼンターの小田原からうやうやしく受け取り、開封し、iPadを通して投影された内容を全員に同時に伝えるという手順を合計3回とった。なお、そのメッセージの文字はミニチュアの活版印刷機を用いて、一文字一文字打ち込んだものを用いた。実際使用したカードと投影の様子は、以下の図4、5を参照されたい。

左) 図4 : 開封したヒントカード  
右) 図5 : ヒントカード投影の様子

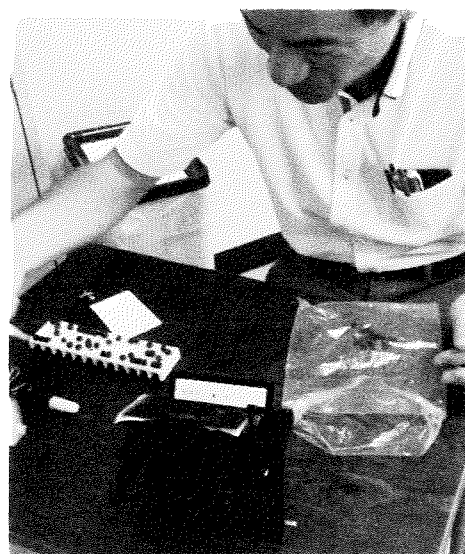


### (5) 3つの謎と120人の知恵

参加生徒は、文系クラス生徒(約120名)で、大教室を会場とし、一斉に受講することになった。生徒は配布されたワークシートを物珍しそうに眺めながら、ペアで、グループで、知恵を出し合いながら謎解きに臨んだ。当日は大学の先生方にもご出席いただき、きさくに生徒と交流(図6)しながら、適宜ご指導いただいた。最終的なヒントカードの作成は、現場で小田原が実際にミニチュア活版印刷機を使った(図7)。活動の様子はおおむね良好であったが、一部生徒が普段の授業とのギャップに少なからず戸惑う様子も見られた。また、英語が得意か不得意か、または日本史選択か世界史選択かという違いで、彼らの取組姿勢に多少差が出ていたようにも思う。前述のヒントカードも功を奏し、予想以上に多くの生徒が50分の授業時間内に3つの謎を解き明かしていた。たとえすべて解くことができなくても、協働しながら最後まで取り組もうとする姿が多く見られたのは大変良かったと思う。



左) 図6 : 真島先生(愛知教育大学)と本校生徒  
右) 図7 : ミニチュア活版印刷機と小田原



### (6) 授業アンケートから見えてきたこと

今回のプロジェクトでは3回生徒アンケートをとった。アンケートの作成にあたっては、大学の先生

方から多くのご教示をいただきながら丁寧に作成した。第一回目となった英語編のアンケートからは、多くの発見があった。

まずは授業自体に関する質問について、問1の「授業の内容に興味関心」について、「持てた」と「どちらかといえば持てた」の合計が約6割いた一方、「持てなかった」と答えた生徒は2割に上った。なお、興味関心を持った生徒は、①授業の展開（謎解き）、②英語の文章、③ラテン語の文章、の順に面白かったと感じている。一方、ネガティブに答えた理由として、①授業の展開、②内容に興味を持てなかった、③内容が難しかった、の順で回答している。謎解き要素がプラスにもマイナスにも働いているが、謎解きの難易度に課題があるのか、あるいは謎解き自体に興味を持てないのか、今後さらに検証する必要があるだろう。

次に、生徒自身の取組に関する質問について、問5で「普段の授業より積極的に取り組めたか」の問いに、「取り組めた」・「どちらかといえば取り組めた」と6割以上が答え、「周りの人と協力できたか」については、8割以上の生徒が「できた」・「どちらかといえばできた」と答えた。

今回の山場である3つの謎解きについては、7割近くが謎①と謎②の解答までたどり着いたが、最後の謎③は6割以上が「できなかった」と答えた。また、今回英語以外のどんな知識技能を活用したか、の問いには、「歴史の知識」と4割が答え、「コミュニケーション能力」、「推理・予測する力」にそれぞれ2割が回答した。

最後に設けた自由記述式で授業に関する質問には、無記名式ゆえのストレートな内容の回答が散見された。教科横断的な活動に「組み合わせの新鮮さ」を感じ、「仲間と協力」し、「謎解きに楽しく取り組めた」と答える生徒が多くいる一方、「先が読めず目的がわからない」ことで積極的な参加ができず、「授業のねらいがわからなかった」と消化不良を示す意見も一部あった。前者の前向きに取り組めた生徒の多くは、本プロジェクトの実践に際し、こちらが意図していたねらいに上手くマッチしたと感じる。また、ネガティブな発言を残した生徒についても、彼らの回答の本質は、「新奇な取組に対応しきれなかった」ことが主たる原因であり、例えば、本プロジェクトのような活動を、高校1年次から始めることができれば、やがて解消される課題ではないか。また、「他の新しい提案やアイデア」を求める最後の質問には、「もっと他の外国語を使いたい」、「有名な物語を原文で読んでみたい」、あるいは「ラテン語についてもっと知りたい」など、今回のような取組が生徒の学びを刺激する可能性を予感させる回答があった。

#### (7) 次の旅に向けて

プロジェクト全体のまとめは本稿後半部に譲るとして、少なくとも本プロジェクトのオープニングとしての「英語の実践」は、確かな手応えを感じられる内容だった。それは授業者としての立場のみならず、生徒の取組姿勢やアンケートからはっきりと実感できる。今回、考査の得点結果や偏差値からだけでは計りきれない学びの可能性を垣間見ることができたのは、これまでの準備に十分見合う対価であったし、この貴重な経験こそが授業者を次の新しいチャレンジに導いてくれる羅針盤になると強く確信している。

## 4. 歴史の実践（小田原）

### (1) 授業直前

前週の授業では英語科の川上が授業を行った。授業中の生徒の表情は生き生きとしており、積極的に

取り組んでいる生徒が多いように見えたが、直後のアンケートでは興味を持てた（どちらかといえば持てたを含む）生徒は59%に留まった。決して悪くない数字だが、授業中の生徒の表情やそれまでの準備にかけた時間やエネルギーを考えると、もっと興味を持てる生徒が多いのではと考えていた。歴史の授業の準備を進めていく中で少し不安がよぎったが、私の専門とする世界史の内容に偏らないように、日本史選択者と世界史選択者が協力して課題解決に取り組めるような授業展開を目指した。

## (2) 授業実践

授業はワークシート（図8）と月村辰雄・久保田勝一訳の『東方見聞録』（岩波書店）の中から川上の授業で使用した部分にほぼ該当する部分（P196～203、本稿では掲載略）を生徒に配付し、かつパワーポイント資料（図9）をスライド表示して実施した。また、会場は前回の授業と同じで本校で最も大きな教室に3クラス約120名の生徒を集めて実施した。

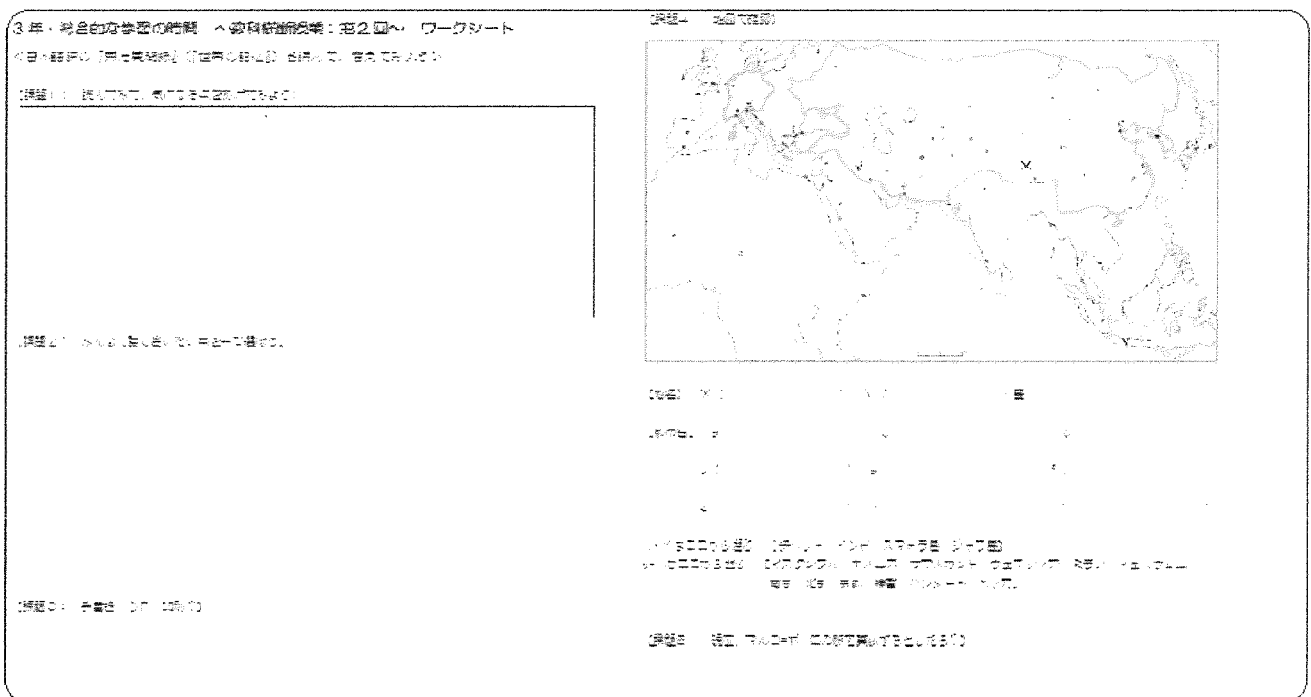


図8：生徒各自に配付したワークシート（実物はA3サイズ）





図9：スライド表示したパワーポイント資料

いざ授業を進めると日本語訳とは言え高校生には理解しにくい表現もあり、一通り読み終えた段階で授業開始から15分経過してしまい、最後に時間が足りない状態になってしまった。

ワークシートの課題1に基づいて生徒に気になる点をあげさせたところ、「この島（小田原註：日本のこと）の住民も～（略）～捕虜を捕まえた者は友人や親類を集め、皆で捕虜を殺し、その肉を焼いて食べてしまう。」という部分を上げた生徒が複数いたため、この点について近くの生徒同士で話し合いをさせた。この部分は小田原、川上も気になっていたためスライドでの紹介も検討したが、表現が残酷なこともあり、紹介を見送った部分である。生徒たちが話し合っていく中で、「本当にこんなことがあったのか」と疑問を持った者もいたが、史実かどうか疑わしい部分があるものの、このような疑問を生んだことで『東方見聞録』という書物が各国語に翻訳され、700年間も読み続けられているということを想起させるためにも、この点について話し合えたことはプラスであったと捉えている。

ワークシートの課題3は前回授業でのヒントカードに活版印刷機を用いたことと繋げたものである。マルコ・ポーロが獄中で話したアジアでの体験をルスティケッロが中世フランス語で書き記したのは1298年のこととされている。この当時はまだ活版印刷機が発明されていないので、写本が作られたこと、活版印刷機が普及した15世紀後半以降に印刷本が広まったこと、いずれの段階でも写し間違い、印刷の不鮮明さ、誤訳などから複数系統の『東方見聞録』が派生していること、実際に授業で使用した英語訳、ラテン語、日本語訳でも違いがあること等を説明した。

課題4はマルコ・ポーロの旅の空間的な広がり認識させるための確認作業であり、課題5で21世紀の現在、このような旅をするとしたら、どんな困難があるかを話し合わせた。課題5の時間は十分取れなかったが、生徒の中には「紛争地帯があって危険。」と現在の世界情勢を踏まえ意見をすぐに述べた者もいた。

最後に、次回からは2回の授業で学んだことを活かした活動をしていくことを予告して授業を終えた。

### (3) 生徒アンケートの分析

授業後に行った生徒アンケートの集計結果の抜粋が図10である。

#### ○授業内容に関する問い

問1 授業の内容に興味・関心を持ってましたか？

- 18% 1 持てた
- 47% 2 どちらかといえば持てた
- 19% 3 どちらかといえば持てなかった
- 15% 4 持てなかった

問2 質問1で1か2と答えた人は、何に興味・関心を持ちましたか？複数可。

- 41% 1 課題1・2
- 25% 2 挿絵1～3
- 10% 3 課題3(本の広まり)
- 19% 4 課題4(地図)
- 5% 5 課題5(現在について)
- 6 その他(自由記述)
- ・日本の呪術について(3組)

#### ○個別の取組に関する問い

問5 通常の歴史の授業に比べて、より積極的に取り組めましたか？

- 14% 1 取り組めた
- 25% 2 どちらかと言えば取り組めた
- 42% 3 いつもと変わらない取組だった
- 9% 4 どちらかと言えば取り組めなかった
- 10% 5 取り組めなかった

実回答数(日本史/世界史)

全体	1組			2組			3組		
	割合	人数	人数	割合	人数	人数	割合	人数	人数
20	10%	1	3	2	27%	6	4	4	
52	53%	7	11	13	40%	8	6	7	
21	19%	4	2	5	19%	5	3	2	
17	17%	8		2	13%	3	2	2	
110									

全体	1組			2組			3組		
	割合	人数	人数	割合	人数	人数	割合	人数	人数
36	37%	3	9	4	44%	12	4	4	
22	26%	2	5	4	24%	4	4	3	
9	12%	2	1	2	9%	1	1	2	
17	19%	2	1	5	20%	3	1	5	
4	7%	1	1	1	2%	1			
88									

全体	1組			2組			3組		
	割合	人数	人数	割合	人数	人数	割合	人数	人数
15	14%		2	3	19%	7	1	2	
28	25%	1	6	4	33%	5	3	9	
46	42%	10	4	13	37%	9	6	4	
10	9%	4	2	1	6%	1	2		
11	10%	6	1	1	6%		3		
110									

図10：生徒アンケート抜粋

アンケートは無記名で実施したが、日本史選択者と世界史選択者での受け取り方の差を把握するために、各自の選択科目については記入をさせた。

【問1:興味・関心を持ったか】は、課題1・2のスライドで紹介した部分は、どちらかと言えば日本史の知識を、課題3・4はどちらかと言えば世界史の知識を必要としていたこともあってか、選択科目による明確な差は認められなかった。

【問2:何に興味・関心を持ったか】は、課題1・2における話し合いを選んだ生徒が最も多かった。アンケートの自由記述でも「日本史と世界史が協力してできたのが良かった。」と同様な意見を書いた生徒が複数おり、この課題に積極的に取り組めたことが伺える。次に多かったのは挿絵である。挿絵は『東方見聞録』の魅力の一つでもあり、興味・関心を高めるために数点をスライドで紹介したが、その狙いは達成できたと思う。課題5を選んだ生徒が最も少なくなってしまうが、これはあまり時間をかけられなかったためと判断できる。視点を現代に持っていく重要な課題であったので、じっくり取り組ませ、次回以降につなげていくべきであった。

【問5：通常の歴史の授業に比べて積極的に取り組めたか】は、選択科目による差が最も開いた項目で、世界史選択者の方が積極的に取り組めた者が多かった。これは日本史選択者が普段とは違う教員の授業を受けることになったこと、課題3・4のように世界史選択者向けの内容がやや多かったことなどが要因であろう。自由記述部分でも「日本史の教材の必要性はほとんど感じませんでした。」と答えた生徒が1名、「世界史と日本史の人がごちゃ混ぜの席順にしたら良いと思います。」と答えた生徒（同様な意見含む）が4名いた。特に座席については、約120名を着席させることを優先して単純な名簿順にしていたため、配慮の必要性を痛感させられた。

自由記述部分では、「授業のねらいが明確じゃないので活動しにくい。」という否定的な意見を書いた生徒もいたが、「日本史の知識と世界史の知識を持つ人と一緒に考えるとおもしろい。深めることができると思う。」と同様な意見を書いた生徒も複数いた。アンケート結果全体を見て、次回以降の活動に繋がる授業ができたと捉えている。

## 5. 探究活動

### (1) 『附高版 東方見聞録』の作成

3回目の授業の冒頭でコロンブスが『東方見聞録』に書き込みをしていること、そしてアジアに興味を持って航海に出たことに触れ、ここからの授業は『附高版 東方見聞録』を作成して愛知教育大学の留学生に日本各地の魅力を紹介し、留学生が現地を実際に訪ねてくれることが目標だと説明した。

理想は高校生が紹介する土地を訪れたり、書籍を読み込んだりすることだが、調査に充てられる時間は3～6回目の授業の計4回と限られていた。そのためインターネットの利用、そして見聞録であることからその土地に住んでいる親類や訪れたことのある教員から情報を得ることも認めた。

一通りの説明後、生徒達は紹介する土地を選び、3名以内のグループを結成し、順次活動を開始した。なお、4回目の授業からは学年団の教員の協力のもと、約120名の45グループを5会場に分けて活動した。4～6回目の授業で情報を整理し、『附高版 東方見聞録』に必要事項を入力し、余裕があるグループは補助資料としてポスター等を作成させることとした。実際にはほとんどのグループが時間不足となり予定外ではあったが、プレゼンテーション3日前からは昼休みにも活動を行った。図11が活動中の生徒達の様子である。

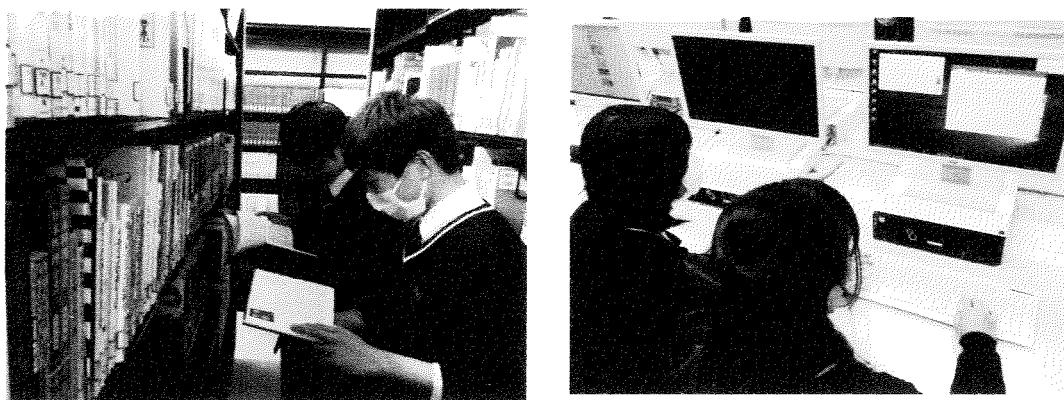


図11：活動中の生徒達

### (2) 留学生へのプレゼンテーション

11月22日（木）に第7回目の授業として留学生へのプレゼンテーションを実施した。愛知教育大学の真島先生、小塚先生のご案内により留学生は15名参加してくれたので、5会場とも複数人の留学生に向けてプレゼンテーションを行うことができた。なお、任意としていたが、いくつかのグループが英

語で『附高版 東方見聞録』を作成し、発表も英語で行った。図 12 はプレゼンテーションの様子である。

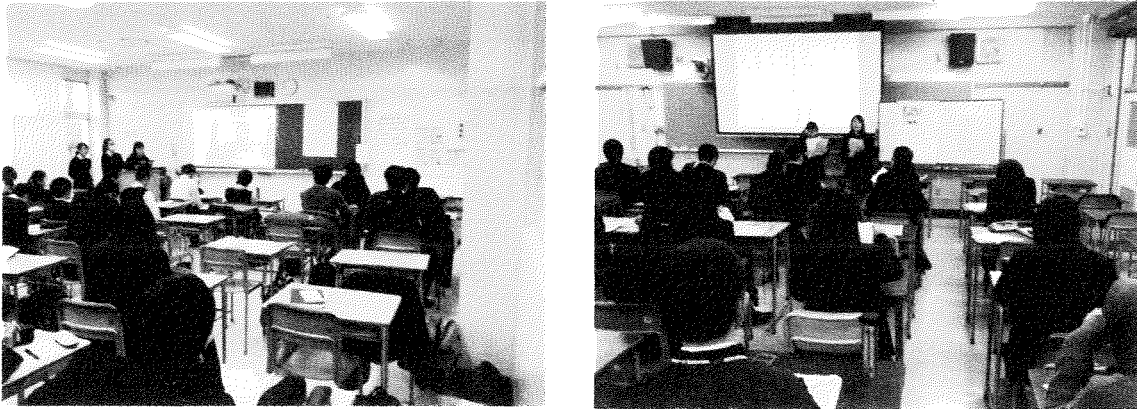


図 12 : 留学生に向けたプレゼンテーション

なお、後日全てのグループ分を冊子にして完成した『附高版 東方見聞録』を授業に参加してくれた方々をはじめとする愛知教育大学の留学生に配付した。この冊子によって、留学生がさらに日本に関心を持ってくれること、高大連携の取り組みが進展することを願っている。

### (3) 生徒アンケートの分析

プレゼンテーションの授業後に行った生徒アンケートの集計結果の抜粋が図 13 である。

		クラス別%・実回答数					
		1組		2組		3組	
<u>(a) 今日の発表活動を振り返ってどう感じますか？</u>							
20%	1 とても面白かった	16%	6	21%	7	23%	9
62%	2 面白かった	63%	24	59%	20	64%	25
10%	3 あまり面白くなかった	11%	4	15%	5	5%	2
8%	4 面白くなかった	11%	4	6%	2	8%	3
		38		34		39	
<u>(a) 今回の総合学習の全体を通して、どのような点に面白さを感じましたか。(複数回答可)</u>							
9%	1 複数の教科が結びついた内容	10%	7	8%	4	9%	5
22%	2 普通の授業では習わないことを学ぶこと	15%	10	24%	12	29%	17
4%	3 答えのない問いについて考えること	3%	2	8%	4	2%	1
11%	4 話し合い	10%	7	12%	6	10%	6
14%	5 発表の準備	19%	13	10%	5	10%	6
16%	6 発表	16%	11	16%	8	14%	8
24%	7 留学生との交流	25%	17	20%	10	26%	15
	8 その他	67		49		58	
<u>(c) 今回の総合学習の全体を通して、どんな力が高まったと思いますか。(複数回答可)</u>							
6%	1 課題を見いだす力	11%	9	5%	3	3%	2
9%	2 資料を読み解く力	8%	7	14%	9	4%	3
23%	3 情報を収集する力	22%	19	23%	15	25%	17
22%	4 情報を整理する力	22%	19	23%	15	22%	15
6%	5 情報を分析する力	5%	4	6%	4	7%	5
19%	6 情報を適切に表現する力	16%	14	17%	11	23%	16
14%	7 他者と協働する力	15%	13	11%	7	16%	11
	8 その他	85		64		69	

図 13 : 生徒アンケート抜粋

当日の発表活動については80%以上の生徒が好意的に捉えている。総合学習全体を通しての面白さを感じた点についても最多の24%の生徒が留学生との交流を選んでおり、留学生を前にしたプレゼンテーションは貴重な機会となったようだ。授業者側も留学生の前での発表ということで、英語を使う必然的な状況を作ることを狙っているのだが、一方で自由記述では「英語圏の留学生が来ると思っていたら、全然関係ない国の人だったので英語で言った意味ないと思いました。」と書いた生徒もいた。これは事前にアジアからの留学生が来ると伝えたことを把握していなかったからではあるが、それ以上にこの生徒の視野を広げていく必要性を感じた。英語を使用することで、英語圏以外の人々ともコミュニケーションが取れる（むしろ、その機会の方が多いであろう）ということを認識させたい。

また、活動を通して高まった力として生徒が選んだものは、情報を収集する力が23%、情報を整理する力が22%と多かった。これは限られた時間で生徒が試行錯誤しながら、取り組んだ成果であろう。自由記述では「時間がもっと欲しい。」という意見が複数見られた中で、「限られた時間の中で準備し、リハーサルし、本番スムーズに発表できるようにするべき。計画的に進めることが大切。」と書いた生徒もいた。この「限られた時間の中で成果を出す。」という発想を多くの生徒が持てれば、日々の勉強に取り組む姿勢もより良くなるのではないか。逆に課題を見いだす力を選んだ生徒は6%と少なかった。この課題を見いだす力こそ、生徒達が社会に出た後、武器になる力であり伸ばしたい力の一つである。残念ながら今回の活動ではその力を伸ばすことができなかった。自由記述の否定的な意見では「趣旨が最後まで分からなかった。」と同様の意見を2名の生徒が書いているが、課題を見いだす力を伸ばすことができれば、このような感想を持つ生徒も減らしていける。そのためには、今回のような取り組みを1年次から継続的に取り入れ、3年間を見通して活動することが必要であり、今後の検討課題である。

## 6. 今後に向けて

教科横断型の授業を実施して、生徒に日頃の授業の繋がりや学びの楽しさを感じさせたいという狙いから、本実践は始まった。この段階では、小田原、川上が過去に検討し、一部実践していた授業の延長であった。そこに愛知教育大学の先生方からの協力も得られたことで、高大連携の要素が加わり、授業の魅力をより高めることができた。特に、3回目の授業以降の課題が『誘致計画書』の作成から『附高版 東方見聞録』の作成に変わり、1・2回目の授業との関連をより深められたこと、留学生の協力が得られ、英語で『附高版 東方見聞録』を作成し、英語でプレゼンテーションをする生徒が少数とは言え出現したことは、高大連携でなければ為し得なかったことである。次年度以降は、この教科横断、高大連携の取り組みを拡大して本校の強みにしたいと考えている。

まず教科横断については、構想から練って実践に至るまでの労力が必要ではある。特に本実践は3クラス合同の総合的な学習の時間での初の取り組みであり、頭に浮かんだアイデアを具体化するのに時間もかかった。ただ、3クラスの2時間分の授業をほぼ二人の教員で準備できたと考えると、こうした取り組みを定着させていけば、長期的には負担軽減に繋がる可能性もある。まずは、より魅力的な教科横断型の授業を考案して、職員間の連携を深めていきたい。

次に、高大連携については、小田原、川上が今まで取り組めていなかったものである。ただ、今年度は国語科の授業以外にも、3年生理系クラスの理科課題研究で愛知教育大学の学生の協力が得られるなど高大連携を活かした通常授業が少しずつ広まっているのを感じている。本実践も高大連携になったことで、より良くなったのは先述した通りである。特に教科横断から始まった取り組みだったため、複数

名が関わる形で連携を進められたのは大きなメリットであり、ここで得られた人と人の繋がりを今後も活かしていきたい。現在、英文で日米和親条約や日本国憲法を読み、そこから歴史の授業を展開していくという構想を練っているが、この授業については法律を専門とする大学の先生との連携を探っているところである。

## 7. おわりに

本実践は愛知教育大学の真島聖子先生と小塚良孝先生の適切なお助言により、充実させることができました。お二人のご協力に心より感謝しています。また、プレゼンテーションを見学してくれた愛知教育大学の留学生の皆さん、生徒の探究活動を支えてくださった学年団の先生方、最後まで一生懸命に活動してくれた生徒諸君にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 8. 参考文献

- 大人の科学マガジン編集部 (2017) 『大人の科学マガジン—小さな活版印刷機』、学研プラス
- マルコ・ポーロ (2012) 『マルコ・ポーロ 東方見聞録』、月村辰雄・久保田勝一訳、岩波書店
- マルコ・ポーロ (2016) 『東方見聞録 (世界の記述) 1485[?]年刊ラテン語版』、東洋文庫監修、フランチェスコ・ピッピーノ訳、勉誠出版
- 文部科学省 (2009a) 「高等学校学習指導要領 (平成 21 年 3 月)」
- 文部科学省 (2009b) 「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 (平成 21 年 12 月)」
- 文部科学省 (2018) 「高等学校学習指導要領 (平成 30 年 3 月)」
- 横井健 (2018) 「高等学校「現代文 B」—安部公房『鞆』読解の試み—高等学校「現代文 B」高大連携授業の実践—」『愛知教育大学附属高等学校研究紀要』、第 45 号 : 1-7.
- Polo, Marco (1485, rpt. 1949) *Itinerarium*. Tokyo: National Diet Library.
- Polo, Marco (1908) *The Travels of Marco Polo*. Everyman's Library no. 306. Translated and edited by William Marsden. Re-edited by Thomas Wright. Introduction by John Masefield. London: J.M. Dent. New York: E.P. Dutton.